

野村敬子・杉浦邦子編

『老いの輝き 平成語り 山形県真室川町』

坂口簾著

『鈴と桔梗』

高木 史人

最上新庄の渡部わたなべ豊子さんの昔語り・節分の由来（鬼髯入譚、片角子かたつのこ）を聴くたびに、学生時代に坪井洋文先生から伺った話を思い出す。坪井先生は、婚姻は異文化との接触だと、いつも学生に注意を促していた。芋の文化と稲の文化、あるいは農村、山村、漁村、町の文化、これらを行き交う人々の交流に注意を促していた。いわば、渡部さんの節分由来譚の、鬼と人間との間に生まれた子どもは、ほくであり、あなたであり、我らだと思ひ、異なる文化に引き裂かれて、文字通り引き裂かれる子どもを、我がこととして聴くとき、この昔語り（異類婚姻譚）は、我らが昔語りとなるのだと。

たそうだが、柳田がこの青年に向かい、北海道出身者に民俗学ができるのかと問うたことを知る機会があった。この問いは、ほくにも重くのしかかり、ほくならばどう答えるだろうか、眠られぬ真夜中に自問することが度重なった（ほくの曾祖父たちは明治二十六年に屯田兵として東旭川村に入植していた）。いろいろな答えを想定してみただけでも、たとえば、柳田國男だって喪失した故郷（郷土）探しをしていた故郷喪失民の一人、播州辻川と利根川縁の布佐とに引き裂かれたのでなかったかと思ひ至るとき、民俗学を志す者は、郷土人の心をしる（知る・領る）ときにも、それは異人としてしるのだろう。民俗学を志す者はそういう引き裂かれを引き受ける存在なので

ないか。それならばほくにも民俗学ができるのではないかと考えたりもした。フィードワークに向かい、人々と繋がりがつつも、覚醒した自分をきつと手放さない。孤独を引き受ける。

さて、いま、子どもは父（鬼）と母（人間）との異なる文化に引き裂かれたことを述べ、民俗学にもそういう引き裂かれを引き受ける必然があるのではないかと述べたけれども、こういう引き裂かれは何もこの二者だけでない。幾重にも重なっている。それを引き受ける毎に、我らが心の皺は刻まれ、深まり、増してゆくのかも知らない。その引き裂かれの一つに、かつてのイエ社会での女の存在もあつたろう。「ヨメ」と呼ばれるそれである。これも学生時代、野村純一先生に「ヨメ」は「結女ゆいめ」だったろうと教わった。イエとイエとを繋ぐ、「結い」だったと。こういうえばよいことのように聞こえるのだが、ヨメの立場からすると、イエとイエとの狭間に引き裂かれるのを引き受けることに他ならない。ヨメは嫁ぎ先のイエに入り込んだ異文化・ヨソモノでもあ

る。家ごとく食事の味付けにも違いがある。それがもし遠く離れた土地への移動を伴った場合にはどうなるだろう。しかも、そのヨメがもし民俗学を志していたら……。

野村敬子・杉浦邦子編『老いの輝き 平成語り 山形県真室川町』は、野村敬子さんと杉浦邦子さんとの共編の一冊であるが、杉浦さんは今回は野村さんのお手伝いだと仰っていた。縁の下の力持ちという役どころだろうか。杉浦さんのことは、別の機会に述べることにして、今回は野村敬子さんに焦点を絞って紹介していこう。野村さんは真室川の酒屋、近岡家の娘として生まれ育ち、上京して國學院大学に進学、白田甚五郎先生の指導を受けた。白田先生が顧問を務める学生研究会（國學院大学説話研究会）に入会し、説話の研究を志した。このようなことは、多くの読者にはお分かりのことだろうから、書き飛ばしてもよいのだけれども、本書の性格を考えるには、やはり、確認しておきたいことである。一九六〇年頃の日本において、女子学生が

どのような位置にあったのか。地方から上京して大学に進学するとは、どのように徴付けされることだったのか。ほくは本人から伺ったことがないので、ぼくじしんの

（一九七〇年代に上京した北海道出身の男子学生だから状況は異なるが）経験から類推するしかないけれども、故郷と一線を画す覚悟があったのでなかっただろうか。帰るところにあるまじという覚悟を持って上京したのでないか。たとえ心の内に入り込まなくとも、身体の置かれた環境はそういうふうに通じ導くのでなかったか。しかも、そのようにして東京に居つくことを覚悟したとしても、東京にもまだいまとは異なるイエスの状況が待ち受ける。ヨメとしての務めが待ち受ける（野村家の長男、純一先生と結ばれた）。これは、ぼくには想像のつかないことだが、野村さんの編む昔話集や論文を読むときに、いつも不意打ちされる意外性、言い換えると民俗研究者としての我が覚悟の足りなさを責められているような居心地の悪さ。これらの起こってくる所以にはこんな背景も働いているのでないかと思う。

こういうと、野村さんのものを読むのを畏れているように思われるかも知れないがさあらず、そこから受ける啓示にはいつも感謝する他ない。ただ、野村さんの幾重もの引き裂かれを引き受ける人物と伎倆とに感謝しつつも、その孤独の深さに、かなしくなる（――しかし、万葉集が恋に孤悲の仮名を宛てたことは思い起こしておこう）。

野村さんの編んだ本書は、野村さんが六〇年に互り通い続けた（棲み続けた、でない）真室川、つまり自分が生まれ育ち少女時代まで過ごした真室川とは少しづつ相貌を違えていった真室川を、東京と民俗学という外からの視座を得（てしまっ）た野村さんがその推移を見据え、じしんの引き裂かれを引き受けつつルポルタージュ的に纏め上げたものである。と、一文で言い切るのには、いかにも欺瞞である。なぜならば、本書を繕けば分かるように、ここで行われているのは、単なる研究でなく、活動だからだ。研究者というメディアを発動させて、運動としてそこに姿を現していくようすを

も描き出している。研究者が避けがちな運動として、東京からの語り手や真室川近隣の語り手をも巻き込みながらの活動が記録されている。そこには、研究と活動という引き裂かれも内包されている。

このような記録から読み取られるのは、かつての望ましい郷土、美しい村の姿だけではなかった。野村さんは、この六〇年の推移を大きく二つの時期に分けて説明する。

昭和時代の約三〇年間、平成時代の約三〇年間で聞いたことになる。そこで昭和時代の昔話採訪は民俗社会の繩尺じょうじくに従って語り婆たちの口承を聞いた。(中略)しかし反面、民俗社会が無視するかにように、全く語りを聴くことが叶わない方々も居た。それらを含む「みんな」を対象にした昔話採訪について、考えをめぐらすことが続いていた。

つまり、野村さんは前半の三〇年を、民俗社会で機能していた「昔話の語り手」(野村純一「語り手」の位置と機能)〔昔話―研究と資料〕九号、一九八〇年、三弥

井書店刊)での定義を思い起こしたい)の聞き書きに注力したけれども、後半の三〇年は民俗社会から捨棄された(機能させられてこなかった)語り手との活動に注力したという。後者は、本書の先蹤として外国人花嫁の昔話絵本や佐藤ミナエ唄の「村むがす」等の報告が思い起こされる。引き裂かれを引き受ける野村さんが見出したのは、真室川の引き裂かれだと言つてよい。ここに現れるのは、小学校に登校しようとしたらセンセイから追いつ出される学費、給

食費を払えない貧しい子どもの姿であり、戦争に駆り出され、満蒙開拓に出て行く貧農であり、外国人花嫁であり……、とかつての「昔話の語り手」像は遠景に退く。しかし、ここで肝要なのは、引き裂かれを引き受ける者だけがまた繋ぐ(連携する)ことができる(かも知らない)逆説だろう。これを言い切るのに、ほくはまだ自信がない。それもまた、新たな引き裂かれの発生

なのかも知らないとも思われるからだ。しかし、自ら引き裂かれの視座を得ていない者が他者の引き裂かれに気づき、引き裂か

れた者を繋ぐ立場に身を置くのは難しいだろう。「みんな」を対象にするとの野村さんの決意表明の裏には、じしんそうありたいという願望、あるいは後を継ぐ者への伝言が託されていると見た。

冒頭に、柳田國男も二つの郷土に引き裂かれたのでなかったかと述べたけれども、民俗学を研究するには引き裂かれを引き受ける資質が必要なのでなかろうか。野村敬子さんは、身を挺してその姿勢を示していた。それでは、長く郷土に在つて、聴き続けた男性の引き裂かれはどのようなものだったのか。山形県下では、「苞つこ漏れ」佐藤義則がすぐに想起される。

二〇〇五年に社会思想史学会で飯倉義之さん、野村典彦さんと共にパネル・セッション「加工文化としての(口承)」を企画した。ところが岡山大学の会場に現れた聴衆は立石憲利さんと同伴の岡山民話の会の方との二人だけだった。パネル・セッション後、空き教室で二時間ほど立石さんから若いころの昔話研究を始めを四人で伺

う仕合わせを持った。県職員として勤務したが、政治活動を疎んじられて山奥の閑職に左遷されたのを幸いと昔話採集に突き進んでいく話は、時間を忘れるおもしろさだった。しかし話としてはおもしろくとも、その当時の立石さんの生身を考えると、そこには深い引き裂かれがあり、苦悩もあつたはずだ。

そういうところ、一冊の詩集が送られてきた。坂口簾『鈴と桔梗』である。はて、どういう詩人かしらと、ページを読み進めて、息をのんだ。本書冒頭の詩「呼び子」の冒頭の連を紹介する。

言葉が言葉を呼ぶということは何／なん
と残酷なことでしよう／山で見失つた
仲間の名を呼ぶうちに／呼び子に答え
られ／呼び負けたら命を失うと／夜通
し呼び続けてとうとう血を吐いて亡く
なつた木挽きの話を／あなたは聴いて
いませんか／それから／へ東の谷
ほうきき／へ西の谷ほうきき／犬を
呼び続けて行き倒れた獵師の話

この詩は、口承文芸を礎にして書かれて
いる。それも、そうとうに深い知識があつ
て書かれている。この話を知っている坂口
簾とはどういう人だろう。しかも坂口は、
「ついに呼び子と呼ばれ落としてしまつた船
頭の話／わたしは聴いたことがありま
す」と類話にも言及していた。

口に境を立て簾を垂らしひっそりと隠れ
る人。口を折つて忍んでいる人。折口信夫。
妙な連想が駆けめぐつてしまつた。けれど
も書名にもしている「鈴と桔梗」という詩
には、副題が付いていた。「鈴と桔梗——
「翁」と「田植草紙」に和して」。

読者諸賢にはもうお分かりであろう。坂
口簾とは、島根県でフィールドワークを続
けてきた田中整一さんの詩人としての筆名
である。

田中さんには、申し訳ないことがあり、
ここで再度書き直しておきたい。それは本
誌三〇号（二〇〇七年）の拙「書評「口承
文芸の表現研究 昔話と田植歌」である。
これは、藤井貞和さんが二〇〇九年の本学
会大会講演（於・奈良教育大学）で、ほく

を批判して下さつたことでご記憶の方もい
らっしゃるだろうが、今回の詩集を読んで
藤井さんの仰る通りだと考えさせられたの
で、あの書評は撤回したい。田中さんにお
詫言ひ申し上げる。田中さんの持ち味は、外
国の理論をどう受け入れるかなどにあるの
でないことを、深く思い知らされた。あの
本は「昔話と田植歌」という副題が重要
だつたと改めて気づかされた。

昔話採集・研究と田植歌採集・研究とを
併せ行うことは、野村敬子さんが幾重にも
引き裂かれを引きうけながら真室川を見続
けてきたのと同様に、田中さんは「かたり
と「うた」との領域を一身に請け負つて、
その引き裂かれを繋ぐ方策を求めていた。
田中さんはまた、民俗学・口承文芸と国語
科教育（大学での教育学部教員）という立
場にも引き裂かれていたかも知らない。し
かし繰り返すが、引き裂かれは繋ぐ（連携
する）ための前提でもある。そうして田中
さんが幾重にも互る引き裂かれを引き受け
ていることを、この詩集も示している。研
究者と詩人と。折口信夫と釈道空との関係

を見てもいいのだが、ここでは藤井貞和さんの詩を紹介したい。「あげがたには」という詩である。夜汽車の中でふしぎな車内放送が聞こえるという。

とつかが、零時五分／おおふな、零時十二分／ふじさわは、零時十七分／つじどうに、零時二十一分／ちがさきへ、零時二十五分／ひらつかで、零時三十一分

と、アナウンスが延々と続くのだが、助辞等の部分が次々と変わっていく。続けて「おおいそを」「にのみやでは」「こうづちゃく」「かものみやが」「おだわらを」と。そうして「ああ、この乗務員さんはわたしたち、日本語を／苦しんでいる、いや、日本語で苦しんでいる／日本語が、苦しんでいる」と受けていく。これをぼくは以前、藤井さんの朗読会で聴いて、(当世風の言葉で言った) 凄いなと思った。何が凄いなという、これは研究テーマを詩にしている。藤井さんは、研究と詩とに引き裂かれているから、繋がっている。繋げている。これは論文にもなっている(「あげがたには」の詩学)

『文法的詩学その動態』二〇一五年、笠間書院刊)。そういえば学生時代、野村純一先生に物語はモノが語るのか、モノに語るのか、モノを語るのか、と問われて心の中を、モノを語るといっても、この詩は、藤井貞和『物語文学成立史』と同じ力で、ぼくの蟠りを一気に払拭してしまった。

これと同様に、田中さんも凄い。坂口籬の詩「呼び子」では、その最後の連に、

呼び子の話を記憶しておこうとは思いませんか／なぜって／わたしちも／いつか呼び子になって／この世界のどこかに棲み続けるに違いない

とある。呼び子の正体が何であるか。これは、研究でもあるろう。呼び子についての洞察を示している。まことに詩は、音声や言葉や文字等を引き裂きつつ繋ぎ合わせる冒險である。

野村さんの『老いの輝き』に戻ると、「さくべい帖」の話に、詩的な刺戟を受けた。文字を持たない人が、自前の文字のよなものを書きつけて記録する帖。

三十五年以前、坪井洋文先生に誘われて、

新潟県岩船郡朝日村奥^{おく}三面に行つた。奥

三面では保存食として鮭の荒巻を作り、保存のため共同の水場に漬けてあつた。荒巻にはイエ毎にイエジルシを刻んだ札を括り付けてあつた。イエジルシは文字ではなかつた。こういうイエジルシや「さくべい帖」に、文字が浸透する前の未成の文字のよなもの^{よなもの}の心意を読み取ることはできないだろうか。いったいにカクは、えがく、引つかく、削り傷つける(描く・搔く・欠く)等をも含意する古い言葉である。「さくべい帖」を書く文字「のよなもの」とばかり見るのではなく、古い言葉カクの感覚を引き受けて、文字以前と文字とに引き裂かれつつ繋ぎ合わせるいとなみだったと捉えるべきでなからうか。それにしても、文字はどこからが文字なのだろう。

『老いの輝き』二〇一八年 瑞木書房刊

本体三五〇〇円(DVD二枚付)

『鈴と桔梗』二〇一八年 書肆山田刊

本体一八〇〇円

(たかぎ・ふみと／関西福祉科学大学)